

追悼文

見瀬和雄氏の足跡を振り返る

木越 隆 三

金沢学院大学にて二〇〇四年四月から教鞭をとられ、二〇一八年三月退職された同大学名誉教授見瀬和雄（みせかずお）氏は二〇二二年八月二日、逝去された。享年は六九歳。まだ若く、「小松市史」通史編の近世史部会長などの要職をつとめ、課題に果敢に取り組んでいたなかでの訃報であった。謹んで哀悼の意を申し上げます。

二〇一四年に長山直治氏、二〇一五年に高澤裕一氏と石川県の近世史研究あるいは加賀藩研究を牽引してこられた研究者が相次ぎ鬼籍に入り、斯界の世代交代が早まったように感ずる。同時代に議論を交わし藩研究の深化につとめたものとして、時の移ろいに感慨を深くしている。

見瀬くん（見瀬氏とすべきところ、以下では学生時代の呼び名で語りたい）は、私の一歳年下だが学年でいえば二つ下の世代である。さらにややこしいのは、私は金沢大学に一年浪人して入学したけれど、見瀬くんは現役で法文学部法学科にパスしたので、学年差は一学年になった。ところ

が、見瀬くんは法学科から史学科に学籍を移したとき一年留年、史学科でも一年余計いたので学年差は三つ下になった。それゆえ何度か、彼の年齢を尋ねたことがあって、そのつど「木越さんの一つ下ですよ」と、面倒な質問に答えてくれた。三つか四つ下の後輩という、間違った印象がずっと焼き付いていたからであろう。でも結婚したのは、私も彼と同じ一九八一年三月であった。そのせいか子供たちの話題で、会話がはずむことも多かった。

見瀬くんは逝去直前の五月、『生体肝移植の記憶』（東京図書出版）を刊行された。これを紐解きながら一九七〇年代に体験したこと、論じ合ったあれこれを想起した。と同時に彼がなぜ史学科に転学科してきたのか、今年『生体肝移植の記憶』を読み初めて知ったことが多い。断片的には聞いていたが、この書物でようやく系統的に理解することができた。

彼は一九五二年四月二八日、石川県珠洲市に生まれ、一九七一年四月に金沢大学法文学部法学科に入学、一九七七年三月法文学部史学科を卒業、同年四月同大学院文学研究科修士課程に入学し一九八〇年に卒業した。私も一九七〇年から七九年三月まで金沢大学のどこかに所属していたので、同じ時代、あの城内キャンパスで、歴史

学とともに学び続けていた仲間であった。

見瀬くんが史学科に転学科してきたのは一九七三年の一月のこと、私は当時史学科四年であった。一九七三年はいろいろな事件があつて、井上鋭夫先生が「建国記念の日」反対の意志を示すため国史研究室で自主ゼミを行うなどの事件があり、研究室としての一体感が高まった時期だったように思う。そういう雰囲気の中に見瀬くんが飛び込んできたわけだが、意外に、このムードにうまく溶け込み、史学科での日本史学の研鑽に拍車がかかったようにみえる。

私は卒論作成に没頭していたが、井上先生は一九七四年一月に急逝された。その後は高澤裕一先生を中心に自主ゼミばかりの時代に突入。私は大学院に進学し、見瀬くんらの史学科三年・四年の学部生とともに様々なゼミ活動を展開したように記憶している。

大学院卒業のあと一年間石川県教委の文化財保護課に籍を置いていた私は、一九七七年四月から、金沢大学法文学部の日本海文化研究室の研究者として三年間、考古学研究室の一隅を間借りし、そこで『白山史料集（上巻）』の編集・刊行に従事した。同年四月見瀬くんは、大学院文学研究科（史学専攻）に入学してきたので、日本海文化研究室

の専業にもいろいろ協力してもらつた。また北陸史学会のお手伝いや、発足して間もない加能地域史研究会の運営や例会報告などで、ともに汗をながした。

とくに印象深いのは、白山比咩神社所蔵の古文書目録作成を日本海文化研究室で引き受けることになったとき、見瀬くんが調査員となつてもらい二人でよく神社までドライブし古文書目録の原稿作成に励んだことである。調査の合間に彼とよくキャッチボールをしたことは、今でもよく覚えていいる。日本海文化研究室にいた頃が、最も濃厚な付き合いがあつた時代だったとあらためて思い返している。加能地域史研究会も若手中心に精力的に活動しており、みな青雲の志をもつて加賀藩研究の刷新に邁進していた。

見瀬くんが二〇年前、重篤な肝硬変を患い、生体肝移植手術をうけたとき、河村好光さんと協力し、金沢大学史学科の同窓生はじめ、加能地域研究会の会員など多くの有志に、手術にかかる費用を応援する募金を呼びかけた。

彼の闘病記録を読むと、二〇年前より、その日が来ることを覚悟し日々を過ごしていたことがわかる。大胆な生き方や発言の裏に、それほど覚悟があつたと知らずにいた不明を愧じているばかりである。

見瀬くんは、同じ研究室の寺井弘美さんと結婚されたあ

と、一九八二年国学院大学文学研究科博士後期課程に入学し、一九八五年に単位取得満期退学。一九八七年一月に国立富山工業高等専門学校講師となり帰郷、同校助教・教授を経て二〇〇四年に金沢学院大学教授に就任された。さらに同大学で一四年にわたり後継者育成にあたるとともに加賀藩研究に専念され、石川県の地域史研究に大きな足跡を残された。

見瀬くんの学問的業績で最も大きなものは、やはり『幕藩制市場と藩財政』（嚴南堂書店 一九九八年）をあげるべきだと私は考えている。一七世紀前半の藩領域において分業・流通構造をこれだけ詳細に検証できた藩は、そんなに多くないからである。高瀬保氏・中野節子氏などの先行研究を土台に、一七世紀前半の地域市場の様相を的確に整理し、展開過程を明確に示したことは意義深い基礎研究であった。

『幕藩制市場と藩財政』では、寛永初期に前田利常が能登奥郡を藩直轄地とし塩専売制を始めた経緯や歴史的意義も説明している。これは、生まれ故郷の珠洲郡の歴史説明にも資するもので、大坂を中心とする幕藩制市場確立以前の加賀藩の地域市場と財政機構確立過程の関連性を明確にし

た成果として注目される。同書に収録された論文はいずれも、大学院在学中から九十年代にかけての作品であり、これを一書にまとめ学位（博士）を得た。

『幕藩制市場と藩財政』は主に一七世紀前半期に限定した研究であったが、今後の課題は全郡が藩蔵入地となつた能登奥郡の特質は改作法以後どのように展開していったのか、藩財政と領国地域の分業構造との関連を視野に検討してゆくこととなろう。明治維新にむけ、能登奥郡独自の経済的役割が地域社会に与えた影響を具体的にみていく必要がある。

一九九八年の『幕藩制市場と藩財政』刊行後、見瀬くんは加賀藩初期の政治史研究に邁進されていった。その頃、「生体肝臓移植」という彼にとって重大な事件がおきた。二〇〇一年六月に大手術を受けた直後、『利家・利長・利常―前田三代の人と政治―』（北國新聞社、二〇〇二年）を刊行し、それ以後も加賀藩成立期の政治史研究を手広くすすめた。『前田利長』（吉川弘文館 二〇一八年）は、その到達点を示すものといえる。いくつか苦言を呈したい所もあったが、病魔との戦いのなかでの苦闘の足跡として、一定の成果を示された点は評価したい。

いつぼう二〇〇五年以後、珠洲市や輪島市の依頼をうけ、

個人所蔵古文書の史料目録刊行に積極果敢に取り組まれた点は、特筆せねばならぬ業績である。『生体肝移植の記憶』によれば、それは自らに課した社会貢献の意義をもつ行為であった。それ以前から加越能文庫（金沢市立玉川図書館蔵）などのうちに重要史料を見つけ出すや、間髪入れず手早く史料紹介に取り組んでいた。基本史料の悉皆的な把握（目録作成）や史料紹介が、地域史研究の基盤であることに早くに体得され、晩年の苦境にあってもこれを励行された。闘病生活を続けながら基礎研究と社会貢献に生涯をささげた姿には頭が下がる。

見瀬くんの行った史料紹介の中では、二〇〇七〜二〇一一年に公刊された「古組帳抜萃（一）（二）（三）」（改作法期の侍帳史料）は私にとつて出色のもので、人名索引まで付されたのは大変重宝であった。つねに座右に置いて参照させていただいた。私の改作法研究において人名探索の重要武器になった。一九八九年の「御書井上筑後殿江被遣候留」も利常の潜伏キリシタン摘発に関する史料として極めて貴重なもので、二〇一八年に公刊した「万跡書帳」（寛永二一年の奥村易英関係文書集）とともに今後もっと活用されるべきものである。また二〇一一年の「今枝民部留帳之内」（八条宮家に入興した富姫関係作事記録）は、前田家・八

条宮家・幕府の関係を窺い知るうえで貴重であり、今後注目されることになろう。

珠洲市・輪島市などでまとめた在地文書の史料目録は、今後の石川の近世史研究の土台になるものばかりであった。約五〇年前、石川県立図書館に設置された古文書課（一九七四〜八六年）では、多くの古文書目録が公刊されたが、見瀬くんは一時期この古文書課に在籍されたこともある。彼の社会貢献の原点はあるいは、そこにあるのかもしれない。

見瀬くんは二〇一一年の肝臓移植のあとも、従来と変わらず誠実かつ真摯な態度を堅持し、加賀藩研究とその基盤づくりに必要な足跡を残されたといつて過言ではない。彼の仕事ぶりからみて繊細で精緻な仕事人だと、ずっと思い込んでいた。しかし、『生体肝移植の記憶』や葬儀の際に聞いた親友や家族のお話から、大胆で鷹揚な面があったことを知らされ驚いた。それほど「太っ腹な奴」だと気付かないままであったが、いま改めて思い出すと腑に落ちることもある。石垣でいうと「野面積み」の野趣にあふれた面があったらしい。私は行儀のよい「切石積み」のタイプだとすっかり思い込んでいた。彼岸にあって、ひそかにほくそ笑んでいるかもしれない。いまはただ、合掌するのみである。